

動作や状態ごとに主語を探す

考え方と確認例

まず述語から見る

主語は「だれが」だけでなく「何が」に当たることもあります。「人が歩く」「花が散る」のように、動作や状態を表す語を先に見つけ、そこに合う人物・物事を探します。人名を探すだけでは、「雨が降る」「悲しみがやむ」の主語を見落としてしまいます。

主語が続く場合を確かめる

例「旅人、道を急ぎて、里に着きぬ。」では、急ぐのも里に着くのも旅人です。途中で新しい主語がなく、行動が自然につながるときは、同じ主語を補えます。ただし、いつも同じとは決めつけず、一つずつ確かめます。

近くの人名が主語とは限らない

例「僧、童を呼びて、道を教ふ。」では、呼ぶ・教える主語は僧です。「童を」は呼ぶ相手。人名の後の「を」「に」も見て、する側とされる側を分けましょう。練習では、述語の横に小さく主語を書くと流れが見えます。

会話の外と中を読み分ける

考え方と確認例

話し手と聞き手を一組にする

かぎかっこの前後の「と問ふ」「と答ふ」「と言ふ」を確認します。例「女、男に『待て』と言ふ。」の話し手は女、聞き手は男です。会話だけを読み、主語を先に決めないようにします。

会話の動作は話し手とは限らない

「待て」と命じるのは女でも、待つ動作を求められるのは男です。「弟が来た」と姉が言え、ば、「言ふ」の主語は姉、「来た」の主語は弟になります。引用の中と外で、「だれが」をそれぞれ確かめます。

問いと答えをつなぐ

「その人はどこへ行ったか」と問われ、「山へ行った」と答えたとき、行った主語は問いに出たその人です。答えた人物自身が行ったとは限りません。省略された主語は、直前の質問や会話全体から補えることがあります。

根拠を言葉にして見直す

考え方と確認例

主語が変わる手がかり

新しい人物名、問いと返答、会話の終わり、動作の自然な順序を確かめます。敬語も手がかりになりますが、この教材は敬語の種類の暗記を求めません。語注を使い、前後の内容と合わせて読みましょう。

頼む人と実行する人を分ける

例「主人、使ひを呼びて、文を届けさす。」では、届けさせるのは主人、届けるのは使いです。語注で使役の意味だと分かった「～さす」「～せさす」では、指示した人と実際の行為者を分けます。難しい形は語注で意味を確認できます。

答えの点検と進め方

①述語を見つける。②主語の候補を置く。③「を」「に」と会話の前後を確認する。④本文のどこから判断したか説明する。Aは基礎、Bは標準、Cは応用、Dは8問100点の確認テストです。解答後、本文の訳でも人物の流れを確かめましょう。

資料と使い方

出典と表記について

本文・訳・設問について

古典原文は保護期間満了の作品からの抜粋。Aの本文は古文の形を用いた教材用作例。現代語訳・語注・設問・解説は本教材独自作成。古典原文は歴史的仮名遣いを保ち、一部の旧字体を現行字体に改め、教材用に段落を区切った。原文の漢字・仮名・句読点は、教科書によって異なる場合があります。

中学2年生が、語注や文脈を手掛かりに古文を読むための教材です。学校や教科書によって扱う作品や順序は異なります。

字数は句読点・かぎカッコ・小さい仮名も各一字と数えます。抜き出しは本文の表記をそのまま写します。段落番号は字数に含めません。確認テストの各問の得点は0点を下限とし、空欄は0点です。

竹取物語 国民文庫 かぐや姫の成長と命名

[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_\(国民文庫\)&oldid=161009](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_(国民文庫)&oldid=161009)

徒然草 國文大観 第52段・第109段

[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

教材用作例 童と小鳥

本教材独自作成。古典作品からの引用ではありません。

出典確認日 2026年10月10日。出典の現代語訳・解説・設問の転載ではありません。